

魔法ってこんな殺伐と
したものだっけ？

納豆坂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくある神様の暇つぶしとしてリリカルなのはの世界に転生することになった主人公。

え、魔法ってご近所のトラブルをこっそり解決とかそういうほのぼのとしたものなんじゃないの？

こんな俺の知ってる魔法じゃない。

なんだか殺し合い前提な能力を神からもらった主人公がリリカルマジカルがんばります。

不定期更新です。タグは随時追加予定。

このタグつけろよ！というものがありましたら感想までお願いいたします。

e p l 1 2	e p l 1 1	e p l 1 0	e p p 9	e p p 8	e p p 7	e p p 6	e p p 5	e p p 4	e p p 3	e p p 2	e p l 1
63	55	51	44	36	31	28	25	20	15	8	1

目
次

ふと気づくと真つ白な部屋にいた。

見覚えなんてあるはずもなく、そもそもこんなところに来た記憶もない。

「おぬしは死んだんじやよ」

突然聞こえてきた声に振り返ると髭面に貫頭衣を着た、いかにも神らしいじいさんが立っていた。

「そーなのかー。で?」

「仮にも神であるわしに対して、で?とはなんじやで?とは。まあわしは忙しい身じやからの、今回は不問にしてやるわい。さて、お前の現状を簡単に説明してやる。適当な能力をやるからどっか転生しろ」

わかりやすいが適当すぎる説明だな、おい。

威厳とかなさすぎだろ。

「じいさんなんかやらかしたのか? 転生っていったら神のミスで死んだうんぬんがテンプレだろ?」

「神がミスなんぞするわけないじやろ。まあ理由は簡単じや、単なる暇つぶしじやよ」

それもまたテンプレなんだがな。

「仲間を集めて塔でも登ってじいさんをバラバラにすればいいのかわ？」

「それをやっていたのは斜向かいの世界の神じゃ。わしはそんなことはせん。まあ、お前の新しい人生を面白おかしく観察はさせてもらうがな」

変なじいさんに人生を観察される。

どんなプレイだよいつたい。

俺の業界ではそれはご褒美とは言わんぞ。

……まあ自称神に観察されたところでどうとも思わんが。

「まあ大体のところは理解できた。んで俺はいつたいどこに転生するんだ？」

「話がはやくて助かるの。お前が転生するのは魔法が存在する世界じゃ」

魔法ね。中世系のファンタジーな世界なのか？

「了解。んじやさつさと転生でもなんでもしてくれ」

「気の早いやつじやお。まだおぬしにやる能力がなんなのかいつとらんじやろうが」

「気にならないといったら嘘になるが、回りの白が眩しくて目がチカチカする。とりあえずもうここからは居たくない。能力の説明はあとで文書で送ってくれ」

「まあいいじやろう。それでは送るぞ。精々わしを楽しませるんじやぞ」

そんなじいさんの言葉と共に俺の意識は途絶えた。

意識を取り戻すと、自分の部屋にいた。

住み慣れた我が家。

ただ一つ、窓から見える景色が今までとはまったく違うということを除けば。

「夢じゃないんだな」

ベッドから降りると目線がやけに低いことに気がつく。

部屋の片隅にある姿見を覗くと小学1年生ぐらいの俺がいた。

「なんで縮んでるんだよ……」

それは高校生探偵の専売特許であって、単なるフリーターであつた俺の仕事ではない。
い。

いや、高校生探偵の彼も別に縮むのが仕事というわけではないが。

まあ考えようによっては、生まれてくるところから人生のやり直しをするなど、20歳を過ぎた俺にとって罰ゲーム以外の何物でもない状況に陥るよりは、現状のほうがまだましであるとも言える。

転生先が住み慣れたワンルームであることから家族などはいないのだろう。

見知らぬ世界に一人というのは不安だが、それはそれである種のメリットがあるわけ

だからまあ問題ないだろう。

生活費やらの諸問題さえ解決すればメリツトのほうが大きいかもしれないしな。

現状に納得したところで部屋の中を見回す。

窓から見える景色など以外にも色々変わったことがあるようだ。

まず本棚からラノベや漫画がごそつとなくなっている。

微妙に残っているものもあるから、ここはかつて暮らしていた日本の所謂パラレルワールドという扱いなのだろう。

なくなった本はこの世界には存在していないと考えれば納得できる。

そしてクローゼットの中身。

ものは同じなのだがサイズが今の体にあわせたものになっていた。

なんというか、割と親切設計なやつだなあのじいさん。

最後に、テーブルの上に封筒と箱。

わりと分厚い封筒を開けると、中からは私立聖祥大附属小学校の入学案内、通帳とキヤッシュカード、住所が変わった転生前の俺の免許証、そしてじいさんからの手紙が入っていた。

転生前の俺の免許証が入っている理由は分からないが、まあ親切設計なじいさんのこ

とだからなにかしらの意味があるのだろう。

まあ手紙を読めば分かるだろうと思いとりあえず考えを保留して手紙を読むことにした。

「なるほどね……」

とりあえず衣住食に困らないだけの金が用意してあること。

俺は兄弟二人で暮らしているという設定になっていること。

箱の中にはデバイスという魔法を使うための補助具というものがはいつてるといふこと。

そして最後に俺に与えた能力について書かれていた。

ちなみに転生前の俺の免許証というのは、今の俺の保護者という設定であり魔法を使えばその姿に変身できるらしい。

小学生じゃ買ひ物とか大変だろうから車とバイクを用意してあるから適当に使えと書いてあつた。

……。

じいさんまじ親切。

さて、俺のもらった能力——生か死か（デッドオアアライブ）——は簡単に言えば心が折れない限りは死なないというもので、腕が吹き飛ばうがどうなるうが心が折れない限りは戦闘が継続できるといふものだ。

ちなみに生きている限りは——それなりに時間を必要とするし痛みはきつちりあるが——怪我などは完全に治癒するらしい。

痛みで気絶すると致命傷なら普通に死ぬので、死にたくなかったら痛みを耐えてがんばれ！とも書いてあった。

……。

いや、確かに魔法が存在する世界だとはじいさんが言ってたから知ってたよ。

だけどさ、転生してみたら小学生で、住環境も転生前とほとんどかわらないんだからもつとほのぼのとしたものだと思うじゃん。

ご近所のトラブルをこっそり魔法で解決——みたいなさ。

なにこの戦闘前提の能力。

魔法で戦争でもしてるんですか？この世界は。

あれか、今までの親切設計はこの殺伐とした世界でじいさんの暇つぶしが少しでも長く引くようにするためのものなのか。

先行きの怪しさにすでに心が折れかける俺であった。

じいさんからもらった能力に、どうにも殺伐とした未来しか想像できない俺だったが、とりあえずそれは今考えることでもないだろうと思いついて直し考えを保留することにした。

……今後もどんどん保留する事柄が増えてきそうな予感もあるがそれも保留することにする。

気を取り直し箱を開けると、中に入っていたのは某林檎製の——転生前には存在していなかったはずの青い——携帯電話だった。

一緒に入っていた説明書を読むとこれがデバイスらしい。

携帯電話型のデバイスなのか、デバイス機能付の携帯電話なのか悩ましいところだが、5分ほど考えたところでどっちでも同じだということに思い至った。

さてこのデバイスなのだが、自己修復、自己進化、解析機能、通話料無料、パケ放題、通信速度1Gbpsな上にどこでも通話可能となんとも高性能。

魔法まじり万能。

そんな訳で早速説明書に従い起動してみることにした。

「マスター認証棚橋誠。デバイスに個人名称を登録。名称バルムンク」

〈認証完了。棚橋誠をマスターとして登録。バルムンク起動します〉

さて、起動したわけだが説明書に書いてあったのはここまで。

説明書といっても起動方法とセールスポイントが書いてあるだけのやけにインクの薄いコピー用紙一枚だったし。

「つーかこれどうやって使うんだ？」

〈とりあえずセットアップって言ってみてよ〉

「こいつ……しゃべるぞ……」

へインテリジエントデバイスだからそりゃー喋るよ。あ、別に喋らなくても念話って言って考えるだけでも通信できるからね。今は家の中だから平気だけど、外でやると独り言で妄想全開な痛い人って思われちゃうから念話使ったほうがいいと思うよ〉

自称神のじいさんからもらった訳だし、まあ喋ったところでおかしくはないのだが、このフランクな話し方はなんなのだろう。

デバイスってみんなこんなもんなのか？

「デバイスってみんなお前みたいなの話し方なのか？」

〈神様製の特注品だからねー、他の子たちとは訳がちがうんだよ〉

えっへんと、無い胸をはる幼女を幻視した。

「まいつか。とりあえずセツトアップ」

〈バルムンク、セツトアップ〉

バルムンクの言葉とともに光に包まれる俺。

光が晴れるといつの間にもやら青い学ランを着ており、手には青色の刀身をしたナイフのようなものを持っていた。

「なんだこの格好？ 学ランアーマーか？ それにこのナイフなんだよ？」

〈学ランアーマーが何かわからないけどその服はバリアジャケットって言って、分かりやすく言うとも魔力耐性持ちの装備ってとこかなー。ナイフは戦闘態勢でのあたしの本体だよ〉

学ランアーマーじゃないならなぜ青い学ランなのか小一時間。

〈バリアジャケットは基本的に本人の意識によつて形が変わるから、マスターの意識にその学ランアーマーってのがあったんじゃないのかな？〉

ってことは1秒間に100発のパンチを繰り出せるあれになる可能性もあったわけか。

ちなみにあれの1秒間に100発っていうのは、青銅の拳の速さをマッハ1、マッハ1 || 約300 m / s、相手との距離が1.5 mと考えたときに繰り出せるパンチの数つ

ていう考え方らしい。

どうでもいいけど。

「バリアジャケツトについては分かった。んで他に何ができるんだ？」

〈えつとね——〉

バルムンクから語られる魔法の数々は俺の想像通り殺伐としたものだった。

射撃、砲撃などの遠距離魔法に始まり魔力を固めて刃にした近接魔法、拘束魔法に戦場をつくる結界魔法。

他にもいろいろあったわけだがどう考えても何かと戦う未来しか見えてこない。

「なあ、魔法って戦うためだけのものなのか？」

〈んー違うよー。お話合いのためのものって王様が言ってた〉

その王様ってのは確実に頭に魔がつくな。

「まあいいや。んで俺は今言った魔法全部つかえるのか？」

〈ちよつとまって、今調べてみるね。——んつと一応全部使えるみたいだけど、使えるっただけみたいだね〉

「分かりやすくいうと？」

〈集団で射撃魔法つかうのが精々ってレベルかな。何の策も無しに一人で戦ったらすぐ死んじゃうね〉

「……まじか」

そんなレベルでがんばれとかあのじいさんマジなんなの？

〈大丈夫だよマスター。そんなその他大勢が精々なマスターのための機能もあたしにはちゃんとついてるから〉

その他大勢とか地味に傷つく。

「その他大勢な俺でもがんばれる素敵な機能ってなによ？」

〈カートリッジシステムって言って、魔力を込めた特殊な弾丸を炸裂させて魔力をブーストする機能だよ。リスクはあるんだけどマスターならつかいこなせるよ！〉

俺なら使いこなせるリスクとか嫌な予感しかない。

「そりやすごいな。んでそのリスクってどんなの？」

〈マスターぐらいの魔力を精鋭レベルまでブーストすると高濃度の魔力がオーバードローして身体に影響を与える恐れがあるってとこかな〉

「具体的には？」

〈すごい痛い〉

確かに俺のじいさんからもらった能力的にその程度のリスクならギリギリ許容範囲だろう。

むしろ相手から攻撃を受けて予測不能なダメージをうけるよりは実害は少ないのか

もしれない。

「えつと……、それ以外に方法はないのか？ 例えば修行すると魔力が多くなるとかさ」

「一応大魔導師養成ギプスっていう魔力的負荷を絶えずかける機能はあるよ。ついでに言えばマスター自身の魔力が増えれば必然的にオーバーフローも減るから戦闘中の負担も減るはずだよ」

「お、それいいじゃん。それでいこう！」

「まあ魔力的な負荷って言っても身体に影響が無いわけじゃないんだけどね。割と痛いぐらいのレベルかな」

神死ね。

「つまり戦闘時だけすっごい痛いのを我慢して戦うか、普通に生活してるときも痛いけどいつかは楽になる日が来るかの二択ってことでもいいのか？」

「その認識で間違っていないよ。まああたしにはサポートしかできないわけだし、どうするかはマスターが決めてね」

「まあ、その二択なら負荷を選ぶしかないだろ。いつの日か、そういうの日かりスク無しで戦える日が来ることを信じて！」

「了解マスター。んじや早速大魔導師養成ギプスを起動するね。まずはレベル1からね」

「よっしどんどんっ！」

……レベル1はダンスの角に足の小指をぶつける程度の痛みでした。

「はじめまして、棚橋誠です。よろしくね」

そう言つて手を差し出す俺に、母親に促されおらずと手をだす少女。
俺と高町なのはの出会いはそのいったものだった。

魔法の確認をした後、俺は近所の散策に出ていた。

三月も終わりにさしかかろうと今日、ポカポカとした春の陽気が実に心地よい。

これから通う学校やスーパーの位置など数時間ほど歩き回り帰宅した。

「出る前に冷蔵庫の中確認しとけばよかったな」

帰宅し、さて飯でも作るかと思ひ立つて冷蔵庫を開けたところで中身が空なこと
に気づいた。

某動画共有サイトで紹介されていた豚バラ肉の塩漬けを仕込んでいたのだがあれは
どうなったのだろうか……。

「今から買ひ物しにいつて帰つてから作るつてなると遅くなるしな。ま、どつか近く
で食べばいいか」

確かすぐ近くに喫茶店があつたはずだ。

「あら？ 僕一人なの？」

当然と言えば当然だ。

こんな子供が喫茶店に一人で来るなどおかしな話だし、そもそも支払い能力もあるかどうかともわからない。

失敗したな……。

ついいつもの感覚で店に入った訳だが自分が子供になったことを完全に忘れていた。だからと言って外食のたびに魔法を使って大人モードになるのもめんどろな話だ。

「あ、お金ならちゃんとするんで大丈夫です」

そう言つて財布を見せる。

「そういう意味で聞いたんじゃないんだけど……。お父さんやお母さんは一緒じゃないの？」

真実——見た目は子供、頭脳は大人——を告げられる訳もなく、適当にごまかすことにした。

実際のところ騙されてくれたかどうかはわからないが、事情があるということは理解してくれたようでそれ以上はなにも聞かれなかった。

「あら、誠君も春から聖祥大附属に通うのね。実はうちの子もなのよ。よかつたら友達になつてもらえないかな？ なんだかあの子いつも部屋に閉じこもりつきりで友達と遊びにいくとかしないのよね。とつてもいい子なんだけどちよつと心配になつちやつて」「ええ、いいですよ。僕も引越してきたばかりで知り合いかいませんから」「よかつたー。じゃあちよつとまつててくれる？ 今呼んでくるから」

そして話は冒頭に戻る。

互いに自己紹介をしたあとは彼女の部屋で遊ぶことになった。

そういえば女の子の部屋にはいるなど前世も含めてはじめてのことかもしれない。

「なのはちやつてすごいいい子なんだつてね。お母さんが自慢してたよ」

あまりにも会話が弾まないため、適当に良いところをあげてみる。

暗い顔をしていた彼女だが、その言葉を聞き顔がほころぶ。

だが、それも少しの間の事ですぐに暗い顔に戻つてしまった。

「暗い顔してどうしたの？ 褒められて嬉しくないの？」

このぐらいの年の子なら親に褒められれば素直に喜べるものだろう。

思春期にもなればまた話は違うだろうが。

「だめ、まだたりないの」

「え、なにがたりないの？」

「なのはもつといい子にならなきやいけないの。もつといい子になればお母さんもお父さんもなのはをかまってくれるはずだもん」

共働きの両親に構ってもらいたくていい子を演じてるんですね、わかります。

非行に走るのが普通じゃね？

なんでいい子にならなきやってなったのか理解に苦しむ。

「大丈夫だよ。そのままでもきつとお母さんはなのはちゃんのこと大好きだから。なのはちゃんのこと嫌いだったら、あんなに嬉しそうな顔で褒めたりしないとと思うよ」

「……本当に？」

「本当だよ。今からお母さんに聞きに行ってみようか？ お母さんなのはのこと好き

？って」

「お母さんお仕事でだけ邪魔じゃないかな？怒られないかな？」

「平気だよ。じゃあいこっか」

「……うん」

半信半疑な彼女を連れ二人で喫茶店へと向かった。

母親は急な娘の行動に戸惑っていたで、一人でいるのが寂しかったみたいですよと教えてあげた。

ごめんねなのは。お母さんなのはのこと大好きよ——
そう言って娘を抱きしめる母親。

「よかったねなのはちゃん」

「うん！」

戸惑いながらも、初めての笑顔を見せてくれるのだった。

e p 4

「バルムンクさんや。今まで全然、全く、これっぽっちも戦闘の要素が見当たらないんだが、俺ギプスしてる意味あんの？」

転生して1週間が過ぎののだが、魔法の魔の字も出てきていない。

小学校の教科書が郵送されてきたのを見てみたが、前世とほぼ同じ内容だった。

能力補正により気力さえあれば普通に生活できるとはいえ、痛いもんは痛いし、常に気をはっていなければいけないので正直疲れる。

〈助けを求めて手を伸ばしている人がいたとして、知るか！つてその手を払いのけられるなら必要ないよ〉

は？

なにその人間性を試される感じ。

「あーそれは規定事項で、俺じゃなきやだめな事態なのか？」

〈規定事項ではあるけど、別にマスターじゃなきや助けられない訳じゃないかな。ただマスターの行動次第ではよりよい結果にできるかもしれないだけ。マスターは——言いは悪いけど——この世界では異物だからね。運命を変えられる可能性を持つ唯一

の存在なんだよ」

「今規定事項って言ったけど、お前はこれから起きることを知ってるってことでもいいのか？」

「知ってるよー。本当のことを言うと神様の暇潰しっていうのはね、別にマスターの人生を観察しているわけじゃないんだ。これから起こる定められた未来が、マスターの存在でどういう風に変化するのか観察するものなんだよ」

魔法が存在する世界——転生する前にじいさんは確かに俺にそう言った。

しかし転生した世界は前世となんら変わらないものだった。

——いや、確かに魔法は存在する。

俺自身が魔法を使えるのだからじいさんの言葉に嘘はない。

ということとは……。

「今後何らかの魔法関係の事件が起こる。そしてそれに俺が介入することをじいさんは望んでいる。それであってるか？」

「へんー確かにあってるけど、それ以上のことは教えられないよー。神様に怒られちゃうからね」

教えてもらえなくとも現段階でも十分に想像はつく。

なぜなら俺は今後事件に関わるであろう人物とすでにあっているからだ。

——高町なのは——

考えてみれば彼女と出会う巡り合わせは明らかに異常だ。

常識的に考えて、こんなあからさまに素性の怪しい子供に自分の娘を引き合わせるだろうか？

彼女の立ち位置がどのようなものかまでは想像できないが、彼女が関わってくることはだけは確実だろう。

「一つ聞きたい。今のギプスやら魔法戦のトレーニングやらでその事件が起こるまでに俺は戦力的に間に合うのか？」

「それぐらいなら教えてもいいけど……。正直言つて間に合わないだろうね。事件に関わってくる人たちの魔力量は100万オーバーで瞬間最大値ならその3倍、今のまま続けても事件が起こるときのマスターの魔力量は10万ぐらいだろうから。でもマスターは神様からもらった能力があるから、相当無理すればそれでもなんとかなると思うよ」

10倍以上の差があんのかよ……。

無理がきく能力とはいえ、そんだけの差を埋めるとなると正直厳しい気がする。

「わかった。確か今のギプスのレベルは1だったよな？ そうだな……。事件が起こるその日までに魔力量が100万を超えられるレベルまで上げてくれ。ついでにマルチタ

スクだっけ？あれで起きている間はずっと仮想戦闘訓練をやる」

〈え、目標値をそこまであげると、たぶん痛みで気絶しちゃうと思うよ？〉

「別にいい。確か意識を保つ覚醒魔法ってあったよな？ あれを常時展開してくれ」

〈本当にいいの？〉

「俺はいっこうにかまわん」

ほんの短い付き合いだとはいえ、すでに知り合ってしまったからな。

女の子を見捨てるような選択は俺にはできない。

それに——幸か不幸かは微妙なところだが——俺は簡単に死なないことをじいさんに保障されている。

体の傷は治るのだし、痛みなどそのときだけのものだ。

なら必要なのはそれと向き合う覚悟だけだろう。

覚悟があれば大体なんでもできる——似たようなことをどっかの兄貴が言ってた。今ならその言葉が頭ではなく心で理解できる。

〈本当にいいんだね？じゃあやるよ〉

「……あ、やっぱ明日からで」

〈……〉

デバイスだから目なんて無いはずなのに、ジト目で見られている感覚があるのは気のせいだろうか。

へたれたっていいじゃないか、人間だもの。

小学校に入学して数日、休み時間に唯一の友人であるのはを探しているときのことだった。

ようやく見つけたとき、なのはは中庭の片隅でクラスメイトと取っ組み合いの喧嘩をしていた。

いいぞもつとやれ!

青春だねーなどと思いながら観戦していると、二人はそんな俺に気づいたようで——今まで喧嘩していたはずなのに——二人がかりで責められることになった。

意味が分からないかもしれないが、当事者である俺にも意味が分からないのだからしかたない。

正直ポルナレフの例のコピペを張りたいたい程度には困惑していた。

一頻り俺を責め立てた二人は、何かしらの共感を得たようで、俺を尻目に握手を交わしていた。

……もう勝手にしてくれ。

それからなのはちゃんと喧嘩をしていた少女——アリサ・バニングス——と喧嘩の原
因となった少女——月村すずか——と一緒に学校で過ごすようになった。

アリサ・バニングス——俺はバーニーと呼んでいる——は名前から分かるとおリハ
フであり、さらにどこぞのグループ企業の社長令嬢らしい。

あと典型的なツンデレ。

月村すずかは簡単に言えば人外。

一緒に過ごすようになってからもどこか壁を作るような雰囲気があるから、きつと今
回の切欠がなかったら、ぼっちまっしぐらだったのではないのだろうか。

人外とさらつと流したが、これはバルムンクが教えてくれた。

なんでも、生き物にはリンカーコアっていう魔力を生成する器官があるらしく、人に
よつて多少の差はあれど人間固有の波長パターンがあるらしい。

しかし月村すずかの波長は明らかに他の人間とは違うらしく、バルムンクの解析によ
ると亜人と呼ばれる、所謂人間と言われるものとは別の進化を遂げたものだろうとのこ
とだ。

正直亜人だろうが人外だろうが俺には関係ないわけで、そもそも転生者で魔法使いと
いう俺の方が僅差でダメだろう。

なにせ月村すずかはこの世界にちゃんと生まれおちたわけだが、俺は違うわけだし。バーニーが引つ張り、なのはが巻き込まれ、すずかがおろおろして俺が部外者気取りで見守りそれをバーニーとなのはに突っ込まれる。

おおよそ俺達4人の関係ってのはそんな感じだった。

そのまま月日は流れ俺達は3年生に進級した。

「将来……か……。みんなはもう結構きまつてるんだよね？」

お昼休み、お弁当を囲みながらなのはがそう切り出してきた。

「あたしは両親とも会社経営だし、いっぱい勉強してちゃんと跡をつがなきゃなーって」

「あたしは機械系が好きだから、工学部に進学して専門職かなー」

明らかに小学三年生とは思えない二人。

俺が知らないだけで今時の小学生ってこんなもんなの？

「んで、なのはは？ 翠屋の二代目なんですよ？」

「んーそれもビジョンとしてはあるんだけど……。あたしこれといって取り柄もないし、なんかもつとできることがあるんじゃないかなーって」

「バカチン！ そんなこというんじゃないの！ それに、あんたあたしより理数の成績いいっていうのにどの口がそんなこというのよ！」

そういつてなのはの口をむにむに引っ張るバーニー。

「誠君はどうなの？」

じゃれる二人を無視してお弁当を食べながらすすすが聞いてくる。

「俺？ 夢は大きくお嫁さんって思ってるけど」

「あんたね……」

いつの間にかじやれ終わったらしく、バーニーがこちらを睨んでいた。

「夢っていうのは不可能に挑戦するものだってよく言うじゃん。だからお嫁さん。ほら間違ってるない」

「はい却下。もつと真面目に考えなさいよね」

「じゃあ適当に進学してバーニーの会社で雇ってもらおう」

「あんたね……。学年でも一番の成績の癖に何いってんのよ！」

学年一位って言っても転生者だし普通じゃね？

「っていわれてもなー。やりたいことなんて何もなし。あ、でもかわいいお嫁さんは欲しいな。まあそれぐらいかな。まあ将来の夢が見つかっていないもの同士仲良くしようね、なのは」

「あんたみたいなのとなのはを一緒にするんじゃないわよ！ なのは、ああいうのはちゃんと反面教師にするのよ」

「わかってるよアリサちゃん」

……なにげにひどくね？ お前ら。

その夜の事。

〈マスター！ 高魔力反応21、うち19個の反応を見失っちゃった！。ごめんね〉

「気にすんな。どうせそれも規定事項なんだろう？ そうでもなきや見失うわけないしな」

じいさん謹製のデバイスがそんなミスをするわけがない。

そのぐらいいは二年の付き合いの中で俺が一番よくわかっている。

つまり、これがじいさんの望む事件の始まりなのだろう。

「とりあえず捕捉した反応の場所を表示してくれ。どうせ危険なものなんだろうから今すぐそこに行く」

〈了解マスター。んつとここことここだよ〉

空中に地図を表示するバルムンク。

「神社と……すずかの家じゃねえか」

〈どっちから行くのマスター？〉

「とりあえず神社だな。すずかの家は正面から行くには時間が遅いし、忍びこむにはリスクがでかい」

同級生の女の子の家に夜中忍び込むとか、ばれたら社会的に死ぬるからな。

「んでー問題の魔力反応ってどこよ？」

へんーちよつとまってるね……。あ、神社の上にいるあれじゃないかな」

……犬っぼいなにかがそこにいた。

「なんていうか戦闘になる予感しかないな。バルムンクセットアップ」

へセットアップ」

「んで、着替えたのはいいけど、あれいつたいたいなんなんだ？」

へ補足した魔力反応があんのわんわんの中にあるから、神社だし変な怨念みたいなの影響うけちゃったんじゃないかなー？」

なにそれ怖い。

「霊的な何かに反応したってことでいいのかな？」

へ霊的になっていうよりも、不安定な魔力結晶が神社に宿る念に反応したってだけだね。残留思念っていったほうがいいのかな？」

いやそれも十分いやなんだが。

〈くるよマスター〉

飛び掛ってくる犬からバックステップで大きく距離をとる。

バルムンクとの仮想戦闘はいやというほどやった俺だが実戦はこれが始めてだ。

慎重にいくことに越したことはないだろう。

「バルムンク！」

〈了解！〉

見た目から近接攻撃しかもっていないだろうと決めつけて遠距離からチクチクしてみる。

二年間痛みに耐えただけあって魔力量も上がっており、カートリッジによるブースト無しでもそれなりの威力をもつに至った俺の魔力弾により大きくその身を削られていく。

「今までがんばってよかった……」

〈ボーっとしてないでマスター！ まだ終ってないよ！〉

「プロテクション！」

完全に油断していた俺に飛び掛ってきた犬をプロテクションで弾き飛ばす。

「あつぶねー完全に油断してたわ」

〈全身を吹き飛ばすか、元となる魔力結晶を切り離すかしないとすぐに再生しちゃうよ〉

再生するからちよつと削ったぐらいじゃ意味が無いと。

切り離すのは中心になってる魔力結晶の位置がわからないので却下。

つーことは高威力の魔法で吹き飛ばすしか選択肢はない訳だ。

「再生持ちなら練習相手にはちよつどいいな」

俺は距離をとりながらも、堅実に魔力弾を足に当て機動力をそいでいく。

再生を繰り返しながらも迫ってくる犬に、少しずつだが確実に交わす距離を少なくしながら攻撃する。

へいよいよマスター！ その調子

「バルムンク、セイバーモード」

何度攻撃を交わしただろうか、相手の動きに慣れてきた俺は直接斬りつけ足を切り落とす。

「チェーンバインド」

切り落とした足が再生しきる前にバインドで拘束し、再び距離をとる。

「バルムンク！」

名前を呼ぶだけでバルムンクが俺の意思を汲み取り、カートリッジ炸裂させる。

確実にオーバーキルになるであろうだけの魔力が俺の体に満ちていくが、このカートリッジシステムにはリスクがある以上やばくない状態で試運転しておくことにこした

ことはないだろう。

「マジックカノンチャージ。ファイア！」

突き出した切っ先から青い光の奔流があふれる。

光が消えるとそこに犬の姿はなく、青い宝石のようなものがあつた。

「これがさっきのの本体って訳か」

「ずいぶんと状態が不安定だけどやっぱり高濃度の魔力結晶だね。人の願いとか祈り、感情つてのはすごく弱いけど一種の魔法だからそれに反応しあんなのが出てきたんだと思うよ」

「このまま持つてて大丈夫なのか？ 俺もあんなふうになつたりしないよな？」

「ちやんと封印すれば大丈夫だよ。とりあえずあずかつておくねー」

バルムンクについている寶石に、今手に入れた魔力結晶を入れる。

……そこ収納スペースだったのか。

「夜の神社だったからまだよかつたけど、あんなのが街中にでてきたらやばいな」

明日にでもまずかの家のやつを回収しないとだな

「あと20個あるからねー。どうするのマスター？」

「どういった代物かわからんけど、あんなのが出てくるだけのものが21個もあるわけないし、ちゃんとした手順を踏めば使い物になるんだろ？」

〈なんでそー思うの?〉

「お約束、予定調和、テンプレってやつから推測した。俺の解釈ではそうだったのは統計的に一番確立が高いからこそそのものだと思ってるからな」

〈答えは正解。本来の用途は魔力タンクってところだろうね〉

「街を守る、魔力結晶が手に入る。正に一石二鳥だな」

〈……マスターこれ使う知識ないじゃん〉

「そこは優秀なデバイスさんにお任せしますよ。神様特製のデバイスなのにまさかできないーなんて言わないよな」

〈そりやでできるけどさー。そのかわり帰ったらちゃんとお手入れしてよねー。変なの斬って汚れちやっただから〉

「そんぐらいよろこんでやりますともさ」

初めての戦闘をこなした翌日の放課後、俺は月村邸へと訪れていた。

理由は一つ、昨日補足したもう一つの魔力反応——いちいち魔力結晶というのも面倒なのでバルムンクとは石つてことで統一した——を回収するためだ。

すずかか塾があるのでここにはいないのだが、事前に月村家の当主であり、すずかの姉の忍さんがいることは確認してあるので後はチャイムを鳴らすだけなのだが……。

「相変わらずこの家はでかいよなー。ぶっちゃけ漫画か！つて突っ込みたくなる」
「ねーマスター行かないのー？ もうここについてから10分ぐらいたつてると思うんだけど」

この二年間の付き合いで何度か訪れたことはあるが、一人でくるのは初めてのことで、そもそもこんなセレブレティーにあふれる家は完全にアウェーだ。

「デバイスのお前にはわからないかもしれないけど、人間には心の準備してもんがだな……」

へもうそれさつきも聞いたよー。面倒だから押しちゃうね」

デバイスのくせに勝手にインターホンを押すバルムンク。

神様特製のデバイスだからかなのかは他のを知らないからわからないが、こいつは勝手に魔法を使える。

今インターホンを押したのも念力系の魔法を勝手に使った結果だ。

まてよ……インターホンを押したのはバルムンクであつて俺ではない。

つまり今この場からダツシュで立ち去つても俺には何の過失もないはずなのだ。

よつてこの場からダツシュで逃げてもきつと許してくれる。

世界中の誰もが許してくれなくても、俺だけは許すよ。

と、くさいセリフを吐いたところで傍から見ればどうやっても俺が押したとしか思えないわけだ。

俺のデバイスがやらかしたということを考慮しても責任の所在はどう考えても俺にある。

……どんなに長々と理屈をつけたところで逃げ場はないようだ。

「確認なんだが、能力的に簡単には死なないよな?」

可能性は低いだろうが、話し合いの流れ次第では戦うことになるかもしれない。

明確な敵ならノリで攻撃できるし場合によっては殺す選択をとることもあるだろう。

二年前に事件に関わると決めたとときにした覚悟つてのは、当然そういつたところも含

まれるからな。

だが今回の場合はどうだろうか？

相手は数少ない友人——しかも美少女——の家族だ。

ガンジー作戦以外に取れるべき選択肢が無い。

あるわけが無い。

〈腕を引きちぎられても死なないけど、頭とか心臓をこークチュってやられたらさすがに死んじやうかなー〉

なにそれぐろい。

「よし、一旦出直そう。すずかが帰ってきたら改めてまた来るってことで」

〈もう押しちゃったんだから諦めて。それに……〉

「どうなされたんですか柵橋様」

まったく気づいていなかったが、月村家のメイドノエルさんがそこにいた。

「……こんにちわノエルさん」

「誠君今日はどうしたの？ わたしに話があるって聞いたけど」

月村家の応接室で俺は忍さんと対面している。

ノエルさんはお茶の準備をしに行っている。今この場には俺と忍さんの二人だけだ。

「率直に言います。僕は魔法使いです。そして話というのはこの家の敷地のどこかになんかいろいろと危険な石があるので回収させて欲しいというものです」

知的な交渉？ そんな無理に決まってるじゃん。

転生しただけの一般人がそんなのできるわけが無い。

基本属性一般人、副属性転生者ってなっただけなわけで頭がよくなっただけじゃないんだから。

「えっと……確かそういうの厨二病って言うんだっけ？ だめよ誠君戦わなきゃ、現実と」

正直そんな反応になるとは予想してた。

だけど思ったよりも心が痛い。

「まあすぐに信じてもらええるとは思っていません。バルムンク、映像を」

〈オツケーマスター〉

エアディスプレイに昨日の戦闘の様子が映し出される。

正直三人称視点の映像ってすごい違和感があるんだけど、サーチの魔法の応用で録画

してらって昨日バルムンクから説明された。

どんな疑問も魔法だからの一言で解決できるって便利。

「あなたが魔法使いだということとはわかったわ。それにこの家のどこかにあるって石の危険性も。でも腑に落ちないことが一つある。なぜあなたは自分が魔法使いだということをも簡単にわたしに打ち明けたのかしら？　まさか友人の家族だから——なんて言わないわよね？」

本当のことを言え。

忍さんの目はそう語りかけてくる。

まあ実際のところある程度予想はついているんだろうが……。

「僕はあなたやさすが人間とは違った種族だということを知っています。そしてこの屋敷のメイドであるノエルさん達がゴーレムに近いものだと言う事も。だからこそ魔法使いだということを打ち明けようと思ったわけです」

「でしようね……。確かにわたしやさすがは人間じゃないわ。夜の一族、わかりやすく言えば吸血鬼と呼ばれる種族よ」

あ、吸血鬼なんだ。

吸血鬼は美形が多いイメージだけど正しくって感じだな。

「そうなんですか。……じゃあ信じてもらえたとところで回収させてもらっていいですか

ね?」

「随分と簡単に流すわね……。ねえ誠君、あなたは恐ろしくはないの? 人間とはちがう種族であるわたしたちを」

「いや別に。それをいつたら俺魔法使いですし、そもそも集団としては敵として扱われることは多いかも知れませんが、個人としては必ずしもそうではないんじゃないですか? そういつた神話やらは世界中にあふれてるわけですし。それに……」

「それに、なに?」

「これ言っているのか?」

ふざけてるって言われたら絶対に怒られる気がするんだが。

「俺の行動理念の一つにかわいいは正義っていうのがあります。それに比べたら種族とかなんて実に些細な問題ですよ」

そもそも、ずずかどであった当初から人間じゃないってことは把握していたわけだし、それを怖がるような精神構造してたらまあ友達になんてなっていないよな。

「まあそれだとかわいくなかったら恐れるのかって話になってしまいますが、俺はそんなことで友達を選んだりはしませんよ」

「じゃああなたの血を飲ませてっていつたら飲ませてくれるのかしら?」

「ええ、どうぞ。ただ……物語でよくある首筋からってというのはお断りさせてもらいた

いですが……」

「あら、どうしてかしら」

「……抱きしめられる形になるし、恥ずかしいじゃないですか」

これわりと死活問題な。

いろいろと当たるだろうし、そもそもし忍さんの恋人である高町兄にみられたらバラバラになる未来しか想像できません。

「ふふふ、本当に面白い子ね。よりによって気にするところがそこだなんて。夜の一族の掟で契約をしなければならいんだけど、先に用事をすませてからにしましょうか。ノエル、誠君を案内してあげて」

「畏まりました」

ノエルさんいつの間に戻ってきたんですか？

ステルススキル高すぎで正直怖いです。

「そういえば、すずかか俺が魔法使いだつてことも、夜の一族だつてことを知っているつてことも知らないんですか？ どうしたらいいですかね？」

「そうね……誠君ここで夕食を食べていきなさい。すずかが帰ってきたらわたしから話しておくから一緒に夕食をとった後にすずかも含めて誠君との契約をしましょう。それでもいい？」

俺から切り出すのは正直面倒だし、その役割を忍さんがやってくれるというのなら俺に文句などあるはずもない。

「わかりました。ではまた後で」

捕捉していた石は月村邸の庭にて極々あっさりが見つかった。

夜の一族の屋敷ということで変な念とか有りそうだし、また昨日のような犬がでてもこともありうるかと考えていたのだが杞憂だったようだ。

まあ問題があったほうが良い訳ではなく、なにもないならそれに越したことはないわけ、ちやつちやか回収した訳だが……。

「ジュエルシードを渡して」

草むらから野生の少女が現れた！

どうする？

たたかう

どうぐ

ニア はなす

にげる

「いや、渡すことは吝かでも無いんだが、そっちの目的にもよるかな」

正直平穩のためってのが主目的であり、回収した石がなにやらいろいろと使い道があ

りそうなのはあくまで偶然の産物だ。

そんな訳なので、少女の目的次第ではぶっちゃけ渡してもいいとは思っている。

……こんな露出度の高い美少女に恩を売れる機会なんてあんまり無いだろうし。

とまあこんな感じで目的を聞き出そうとした俺だったのだが、彼女の返答は魔力弾だった。

「渡してくれないのなら、力づくでも……」

あの、俺あげてもいいって言ったよね？

日本語わかりますかー？

殺してでも奪い取るが許されるのはロマンシングなあれの中だけですよ。

「まったく……。人の話ちゃんと聞けよ！ バルムンク、封時結界展開！」

〈オツケーマスター〉

こんな風に始まった初めての対人戦な訳だが……。

これだけははつきりと言える。俺は無力だ。

「なあ、俺とあの子の魔力量の差ってほとんどないはずだよな？ そういう風になるよ
う色々と耐えてきた訳だし」

カシャンカシャンカシャンカシャン——

〈そうだよー。魔力量だえならほぼ同じ。むしろマスターの方が多いくらいかな〉

カシャンカシャンカシャンカシャン——

「じゃあなんで俺耐えてるだけなの？ つーか電気っぽいのは魔法ってことで理解できるけど、俺の知ってる魔法と違うんだけどあの子の」

カシャンカシャンカシャンカシャン——

「だってマスター所詮その他大勢だもん。全ての魔法を使えるってだけで使いこなす才能なんてないんだからしかたないよ」

え？

「あの子と同じ魔法を同じ魔力量で使ったとして、マスターとあの子じゃ多分何倍も威力に差が出ると思うよ」

え？ え？

「才能ってやだねー」

ネー。

「俺頑張ったじゃん！ すげえ頑張ったじゃん！ 何？ 全部無駄？ 無駄だったの？」

「現実には厳しいんだよマスター。マスターの努力はすごい無理すればってのが無理すればってなったぐらいだからね」

カシャンカシャンカシャンカシャン——

ああそうですか。

だからさつきからカシヤンカシヤンってずっとリロードしてるのね。

俺の才能じゃ絶えずカートリッジ使って防御しないとイケないってことね。

……泣いていいよな。

〈でもマスター、あの子魔力が切れたみたいだよ！ チャンスチャンス！〉

チャンスっていうけど、多分どう考えても俺の方が満身創痍だぞ？

全身に痛みを感じるし、正直左腕はさつきから感覚が無い。

全部カートリッジのオーバーフローでのダメージだけだな。

……まあ動けるんだけど。

「バルムンク、バリアジャケット解除」

〈え？〉

バルムンクを待機状態に戻し、肩で息をする少女へと近寄る。

「君じゃ俺には勝てないよ。とりあえず話をしようか」

「……どういこと？」

「さつきも言ったけど、俺は別にこの石を集めているわけじゃないからね。危険そうだから回収しているだけだ。つまり欲しい人がいるなら譲ってあげてもいいってことだ

よ」

「じゃあなんで渡してくれないの？」

「どうして必要なのか聞きたかったからだよ。危険だから集めていたものを、欲しいってだけ聞いて渡したら危ないだろう？」

「……ジュエルシードを母さんが欲しがってるから」

こんな石を集める理由が母さんが欲しがっているからね。

それだけしか言えないのは、それだけしか「言えない」からなのか、それともそれだけしか「知らない」からなのか。

まあ後者だろうな。

こんな危険なものの回収に少女を向かわせる。

さらに言えばこの石がこの街に出現したのは昨日のことだ。

それを「回収」ではなく「欲しがっている」という彼女の母親は多分碌なやつじゃないだろう。

どう考えても渡していいとは思えない。

「じゃあこうしよう。俺はこれから先もこのジュエルシードについていたかな？こいつを集める。さつきもいったけどこの石は危険なものだからね。んで君のお母さんと直接交渉して譲るか決めるよ。それならいいだろう？」

少女は少し考えるそぶりを見せたが、やがてコクリと頷いた。

「まあこれからは見つけたら早い者勝ちってことでいいんじゃないかな？俺が回収しても君が回収しても結果はそんなに変わらないんだし。無駄に魔力を使う必要もないでしょ」

「……うん。それでいい」

「じゃあそれで決まりつと。俺は棚橋誠、誠って呼んでくれ。よろしくな」
名前を告げ、手を差し出す。

「マコト……、うん。フェイト。フェイト・テストロッサ」

差し出した俺の手をフェイトが握り返してくる。

「じゃあまたな、フェイト」

「またね、マコト」

フェイトが空中へ飛び上がると姿が掻き消えた。

「戦闘回避！」

〈ねえマスターなんで見逃したの？〉

「フェイトが……悲しい目をしてたから……」

〈ダウト！〉

チツ。

「本当の目的を知らされてないような捨石つぽいのの相手にしても仕方ないだろ。丸め

込めるならそれに越したことはない。それにジュエルシードだっけ？あんな正直いらねえし、単純に労働力二倍はおいしい。それにしてもちよろかったな。まともな教育受けてきたのか心配になるレベルだぞあれは」

「多分……受けてないだろうね。どんなに才能があっても、フェイトぐらいの年齢での魔力技能は異常だもの」

「つーかそれよりも、才能がないってどういうことだよ！」

「へすずかが帰ってきた気がするから結界を解くね」

「確かに結構な時間フェイトと対峙していたから、帰ってきてもおかしくはないが……」

「ごまかされないからな。」

フェイトと別れた後は予定通り月村邸で夕食をごちそうになり、契約——正直どうでもいいので内容はちゃんと覚えていない。夜の一族とやらの不利益になるようなことをしなければいいだろうとは思っている——をした。

まあそれで終わればよかったのだが、そうは問屋が卸さなかった。

今一つ俺のことが信用できなかったそうで——契約したっていうのに……——月村姉妹に血を吸われることになった。

まあそれだけならいい。正直献血と感覚的にはかわらないからな。

問題は、忍さんが俺の首筋から血を吸ったということだ。

なんか柔らかいものが当たると、あつたかいし、良い匂いするしで赤面してしまったのは言うまでもない。

まあそれも百歩譲っていいとしよう。

だがなぜかすずかが姉に対抗意識を燃やしてしまったらしく、忍さんを俺から引き剥がすと力いっぱい俺を抱きしめて血を吸い出したのだ。

……正直たまりません。

いや別に俺はロリコンというわけではない。

なんというか……前世の年齢も考えればロリコンかもしれないが、今の俺は8歳だ。

そのため女性の好みが年齢相応になっているようで、まだ二次成長も迎えてないよう
なすずかになにかと反応してしまうわけだ。

だから俺はロリコンではない。

ちなみにいつもは輸血パックから血を吸っていたすずかにとって、直接血を吸うとい
うのは初めてだったそうさ。

すずかの初体験。

こういうとなかなか背德的で卑猥だが、俺にとつてはそんな甘いものではなかった。

8歳児から普段輸血パックから吸ってるのと同じ量の血を吸えばどうなるのか？

答えは簡単で、貧血になるに決まっている。

そんな顔色の悪い俺を心配した忍さんは、月村邸に宿泊することを勧めてくれた。

その時は素直にありがたいと思っただが、俺がおかれている状況を考えてとあれは
狡猾な罠だったと言わざるをえない。

ちなみに俺の今の状況はといえば……。

すずかのベットで二人で寝てる。

一応謹んでお断りさせてもらったのだが——まあ本当に自分が夜の一族だと受け入

れてくれているのか不安だったのだろうか——すずかの熱心な説得に俺が折れる形になった。

想像してみてください。

目に涙を浮かべ、こちらを不安そうに見つめてくるすずか。

……これを断れるのは真性の鬼畜だけだろ。

姉はにやにやこつちをみているだけで完全な役立たずだし。

ふと、寝ているであろうすずかに目を向ける。

母親の胸に抱かれる赤ん坊のような、そんな安心しきった顔で眠る少女。

血を吸われること。一緒に眠ること。

この程度のことでの顔が見れるのであれば、貧血や俺の羞恥心など軽いものだろう。

すずかは文字通り人とは違う存在なのだから。

これはすずかがお風呂に行っている間に忍さんから聞いた話なのだが、すずかは夜の一族に生まれたという運命を呪い血を吸うという行為に忌避感をもっているようだ。

そんなすずかが俺から直接血を吸うということは、俺の信頼をためすという以上に俺への信頼の表れだろう。

「これからもずっとそばにいるさ」

そう言葉をかけながらすずかの頭を軽く撫で、俺はすずかに背を向け目を閉じた。

「……ありがとう」

そんなすずかの言葉を聞こえないふりをしながら。

e p l l

「お、フェイトじゃん。なにしてんだー?」

休日にジュエルシードを探しに家をでると、多分俺と同様にジュエルシードを探している途中であろうフェイトと出会った。

「ジュエルシード探してるのか? つーかここ俺の家の近くだから、とつくに調べ終わるぞ」

「あ、マコト。そうなの?」

「そうだぞー。あれだな、探索したところ共有してたほうが無駄がなくていいだろ。どっかでお茶でもしながらその辺話そうぜー」

「俺が調べたのはここからここまでとあとはこの辺だな」

「わたしはここからここまで」

本屋で地図を購入して適当な店に入る。

俺はアイステイーをストレートで、フェイトはコーラを頼んでいた。

炭酸を飲むのは初めてなのか、飲むたびにふみゆつとなるのが若干かわいい。

……しかし飲んだことないのに頼むとか、中々チャレンジャーなやつだな。

「結構かぶつてるとこあるなー。まあいいけども。そういやフェイトつて今どこにすんでるんだ？」

「わたしは……えつと……あ、ここ。ここに住んでる」

俺の家からは少し離れた、街中のマンションを指差す。

「んじや俺はこつち側で、フェイトはそつちな。家の位置から考えても効率いいだろ」

「そうする。そういえば……この間はごめんなさい」

そういえば全部防ぎはしたけど、すつこい魔法打たれたな。

「気にすんなよ。それに俺無傷だったろ」

「嘘。どういう仕組みかわからないけど、魔力をブーストしてたでしょ？ あんな無茶

して無傷なはずない」

「……ばれたか。魔力のオーバーフローでのダメージつてすつげえ痛いけど見てわかる傷ができるわけでもないからばれないと思っただけだな」

心配されたい訳ではないが、体の状態に関わらず動ける能力だから余計に自分にしか辛さがわからないという。

「少しでも魔法に触れたことがあれば気づける。それにしてもどうやったらあんな高

濃度の魔力を内包して普通に動けるの？ 普通なら絶対に無理」

「ああ、それなら簡単だ。俺の能力で、簡単に言うとききてる限りは動けるってやつのおかげだな。ただでさえ魔力の運用効率悪いのに、オーバーフローの痛みで気絶しないように覚醒魔法使ってるから、ブーストしてもあんまり魔力を防御に上乘せできないんだよなー」

カートリッジをつかうとオーバーフローで痛みを感じる。

それで気絶しないように覚醒魔法を使う。

覚醒魔法で魔力を使うから魔力が足りずにまたカートリッジを使う

なんとという負の連鎖。

さらにカートリッジを使うたびに覚醒魔法の強度を上げなきゃいけないから、カートリッジのブースト効果はどんどん落ちていく。

こないだのフェイトとの戦闘で馬鹿みたいにカートリッジを使ってたのはそれが原因だ。

最終的にカートリッジでブーストした魔力の9割は覚醒魔法にもってかれてたしな。「どうしてそんなに無理して……、それなのに協力してくれるの？ 話も聞かないで行き成り襲ったってどういうの……」

あ、話きかなかったって自覚あったのか。

どっちかっていうと自覚有りのがたち悪いんだけどな。

「正直あれぐらいならなんも問題ない。それにこないだも言ったけど、俺はジュエルシールドがこの街からなくなればそれで良い訳で、ぶつちやけて言えば一人で探すのはめんどい」

「それだけ？ 自分の能力も簡単に明かすし、どうしてそんな簡単に人を信じれるの？」

「……ノリだな」

「ノリ？」

正直自分でもどうかと思う俺の発言にポカーンとなるフェイト。

こんな顔でもかわいってのは、きつとこの先生きていく上でだいぶ楽だろうなと羨ましくなる。

……じいさんめ。どうせなら超絶イケメンにしろよな。

「そう、ノリ。その場の雰囲気とか、俺の直感でフェイトなら信じてもいいって思っただけだ。それでも裏切られたとしてもそれはそれ。自己責任の範囲だろ。それに——」
どう考えてもふざけているようにしか思えない発言に少量の真剣さを混ぜる。

そんな僅かな雰囲気の変化を感じたのか、少しだけ真剣な顔をするフェイトを見つめる。

……どうしてそのエアリード能力をこないだ生かせないかな。さつきは問題ないっ

ていったけど、痛いもんは痛いんだからな。

「それに、フェイトは裏切るようなやつなのか？」

こんなに協力的なのにひどいやつだな——

わずかばかりの意地悪を込めた笑顔で見つめる俺に、フェイトはブンブンと首を横に振る。

「マコトは、私の話をちゃんと聞いてくれた。私はマコトの話なんて全然聞こうともしなかつたのに……。それに母さんにジュエルシードを譲ってくれるって約束してくれただ。そんな人裏切れる訳がない」

いや、交渉はするけど譲るって決めたわけじゃないからな。

いい話っぽいから空気読んで訂正しないけど、割とそこ重要だからな。

「ま、それならいいだろ。これからもよろしくな」
「うん」

気恥ずかしさを感じたのか俺から顔を逸らして再びコーラを口に含むフェイト。

あ、またふみゆつてなった。学習しない奴だな全く。

「……これ、もうやだ」

瓶ごと提供されるタイプの店だしな、炭酸初心者にはちと厳しかったか。

……まあ知ってても教えなかつたけどな。

「んじやこつち飲むか？ あんまり飲んでないし、なにも混ぜてないから平気だろ」
そういつて飲みかけのアイステイーをフェイトのコーラと交換する。

「炭酸系は瓶で飲むのが一番うまいと思うんだけどなー」

そういつてフェイトの飲みかけのコーラを口に含む。

「ん？ どうかしたのか？ 顔赤いけど」

「なんでもない」

アイステイーを飲むフェイトの顔は少し赤い。

子供じゃないんだから、まさか間接キスを気にしてるとかかないよな？

……そもそもフェイトの育ったところでそんなこと気にする習慣ってあんのか？

「さて、これからどうす——」

「マスター！ ちょっと遠いけどジュエルシードの反応だよー」

「マコトー！」

「わかってる！」

急いで会計を済ませ、店の外に出る。

反応があつた方を見ると、世界樹と呼んで差し支えないような巨木が立っていた。

《バルムンク。あの木をみてくれ。あいつをどう思う？》

〈すごく……大きいです……〉

そういえば念話つかったの初めてな訳だが、こんなお約束をするために使うのは正直念話の無駄遣いかもしれないな。

だが後悔はしない。

「フェイト、ジュエルシードの場所分かるか？」

「サーチャーを使えば分かるけど……、範囲が広すぎて時間がかかる。広範囲を攻撃できる魔法を使ったほうが早い」

「それだと街の被害がなー」

だが、こーやって対策を練っている間にも巨木は成長を続けていく。

「あんまり考えてる時間もなさそうだな」

しかし二人で頭を抱えていたのもほんの僅かな時間だった。

桃色の閃光が巨木に向かって放たれ、ジュエルシードを封印したからだ。

「あれフェイトの知り合いか？」

「一緒に探している人はいるけど、あんな長距離からの砲撃なんてできない。私に聞くことはマコトの知り合いでもないんだよね？」

「心当たりが無い訳じゃないんだが、確信があるとは言えないな。魔法使えることを隠してるからそいつに聞くわけもいかないし……」

ちなみに俺が疑っているのは当然なのはだ。

「まあ向こうの目的もジュエルシードってんならいずれどつかで会うだろ。とりあえず俺の心当たりの名前教えとくな。なのは、高町なのは。俺の予想通りならこいつだし、多分名乗ると思うからそんな時は俺に教えてくれ。まあ間に入るぐらいいはできるから」

「……女の子？」

「そうだ。一応俺の幼馴染になるのかな」

小1から小3の付き合いつて幼馴染って呼べるのか？

「……ふーん」

ジト目で俺を見つめるフェイト

いや、そんな目で見られる要素なかっただろ。

「ま、まあ折角会ったんだし、今日は一緒に搜索しないか？ 一人で探すのも飽きるからな」

「……わかった。じゃあいこ」

そんな簡単な一言で機嫌を良くし歩き出す、あまりにも素直な少女の背を追いかける。

二人で搜索しているところを忍さんと高町兄に見つかり、気まずいことになったのはまた別の話。

e p l 2

高町家、月村家、それと俺とバーニーで温泉に行くことになった。

ジュエルシード探しなんて正直どうでもいい。

どう考えても温泉の方が重要である。

なんせ俺は子供だからな！

「ちつくししょう。俺はこの世界を憎む」

嬉恥ずかし混浴イベントなんて

まあよくよく冷静に考えてみれば、高町家が参加しているということは男の保護者がいるということ、そんな状況で子供とは言え女湯に入るなんてことができるわけなかった。

「誠君どうしたの？」

「ほつときなさいすずか。あなたにはわからないことだらうから」

ちなみに落ち込む俺に優しい言葉をかけてくれるのがすずか、ほつとけといっているのは忍さんだ。

「すまんすずか。やり切れない衝動に身を任せ、世界の成り立ちとか神の存在とかどうして地球は回っているのかとか考えてた」

「う、うん。いつもの誠君だね」

それは俺がいつもおかしいということか？

「誠君、貸切風呂借りてあげましようか？」

忍さんがニヤニヤしながらそんなことを言ってくる。

いや、夜の一族という特殊な事情を考えればあなたがなぜそう言っただけ分かりますが、それにしたってすずかの自身の意向つてもんがあるでしょうよ。

そもそも意味がわからずに頭にクエスチョンマーク浮かべてる内はまだ早いと思いますよ。

「お姉ちゃんどういうこと？ 何で貸切風呂借りるの？ 露天風呂はいったばっかりだよ。」

聞くなすずか！

「すずか、それはね……」

いや、あなたも教えなくていいですから。

すずかの顔真赤になっちゃったからね。

「よし、卓球やろうぜ卓球！ 温泉っていったら卓球だろ」

有耶無耶にする為に、卓球場へと走った。

深夜、バルムンクからジュエルシードの反応を感知したと起こされ、そつと部屋を抜け出した。

その時なのはの姿がなかったからなんとなく予想はついていたのだが、俺が見た光景はもつと殺伐としたものだった。

「なあバルムンク。魔法ってなんなんだろうな」

「前も言ったけど、お話し合いのためのものだって」

肉体言語のならぬ魔法言語ってことか。

もうやだこの世界。

「それは知ってる。いやそれでもこれはないだろ」

「へそうかなー？ ある意味正しい魔法の使い方だと思っただけだねー」

俺の見た光景とはなのはとフェイトがガチで魔法戦をやらかしているというものだった。

「フーかき、フェイトは言わずもがなののはだつてかわいい部類にはいるのに、あんなガチでやりあうとかどうなの？　ぶっちゃけ引くわー」

〈譲れないものがあるんだよ！　……きつと〉

そりゃー無意味にあんなやらかしてたら引くつてレベルじゃねーよ

「帰つていいかなー」

〈そんなこと言つてマスター、見なかったことになんてできるの？〉

いやまあね、そりゃーそんなんできかないけど。

正直に言つて係わり合いにはなりたくない。

「俺も大概お人よしだからなー」

〈俺のために争わないでーとか寒いこと言えばきつと止まるよ。空気がつていうか時間ごとね！〉

とね！

「それはやらんからな！　まあでも、取り返しをつかない事態になる前に止めとくかー」
覚悟を決め、戦闘に割り込むことにする。

結果から言えば、決死の思いで飛び込んだ俺は二人に羽虫のように打ち落とされた。

「マジお前らさ……」

「ごめんなさい……」

戦闘自体はとまったのでまあ結果オーライといえば結果オーライのだが、二人同時に邪魔の一言と共に魔法を撃ってくるのはどうかと思う。

「あの……あなたは？　なのはやそっちの子の知り合いみたいですけど」

「オコジョが喋るだと……」

「ユーノ君はオコジョじゃないの！　フェレットなの！」

「ユーノ君ってことは雄なのか？」

「っーかこいつ女湯入ってたよな？」

絶対に許さん！

「いや問題はそこではなく……」

「まあジュエルシードの関係者で、どうせなのはに魔法教えたのもお前だろう？」

「そ、そうですね。なぜそこまでわかるんですか？」

「いや、普通に分かるだろ。話せるオコジョ「フェレット！」……フェレットがいる時点でどう考えても魔法関係だろうし」

なのはお前だけフェレットにこだわんだよ。

「ユーノ君に協力してジュエルシードを集めてただけど……」

そつとフェイトの方に視線を向けるのは。

「フェイトお前な……。とりあえず魔法で何とかしようとするのまじ止める」

「だってマコトが集めてるのが知ってるやつだったら多分名乗るだろうっていつてたから。名乗らないってことはちがうんだと思ってる……」

それ以前に、名乗る暇を与えたのかと問いたい。

「まあ状況は理解した。ユーノだっけ？ とりあえず俺もフェイトもジュエルシードを集めてる。俺は危険だから、フェイトは母親に頼まれたからだそうだ。だよな？ フェイト」

「うん」

「つーわけだから、そっちの事情も教えてもらおうか」

「ユーノが発掘したジュエルシードを輸送中に事故があつて管理外世界である地球におっこつて、んで責任感で回収しにきたけど返り討ちにあつて偶然知り合つた魔力のあるのはに協力を依頼したと」

「その通りです」

……全部こいつが悪いんじゃない？

「あれは、ジュエルシードは危険な物なんです。だから早く回収しないと」

「そんな危険な物なら民間に輸送させんなよと問いたい」

いや割と真面目に。

「つーか危険なものって言うけど、現状が不安定だから危険なだけでちゃんと手順踏めば電池とかわらんぞこれ」

「いや、そんなはずは……。次元断層を引き起こして世界を崩壊させる危険を持ったものなんですよ?」

「そういう認識なら余計民間に輸送なんてさせんなよ。それにあれだ、遺跡から発掘したっていつてたよな? 多分その遺跡に取扱説明書みたいなのあつたんじゃねえの?」

探査がすすんでなくて気づかなかつただけで」

「使い方わからないから自動車からガソリンだけ抜いて、爆発するから危険だつていつてるだけな気がする。」

「例えそうだとしても、現状で危険なことは変わらないはずですよ!」

「まあそれは認める。だからフェイトと協力して集めてるわけだしな」

「では……」

「だからと言ってそつちに渡すわけでもないけどな」

「どうしてなの誠君!」

「フェイトっていう先約があるからな。俺の集めたジュエルシードは条件次第ではフェイトっていうかフェイトの母親に譲る約束をしてる。だから回収が済んだあとの所有

権とかめんどくさい話はそっちとやってくれ」

最終的にこの街の平穏が守ればそれでいい。

なのはやユーノ達は渋ったけど、まずは安全の確保が第一ということとは理解しているらしくなんとか納得してくれた。

その後、忘れていたお互いの自己紹介をさせ搜索済みの範囲や今後の搜索予定などをすり合わせたのだが、

「高町なのは。なのはって呼んでねフェイトちゃん」

「なのは……。うん」

いつの間にか二人が仲良くなっていた。

なんか通じるものが合ったらしい。

……。しらんけど。

「お前らよくあんな魔法戦やらかして普通に仲良くできるな」

「え、そんなことしてないよ？ あれはちよつとした自己紹介だよ」

「残念だがなのは、お前との付き合いも今日限りだ！」

「えーなんでなの誠君？」

本気でわたわたするなのは。

……戦闘民族は友達にはいません。

「マコト、そんなこといつちやだめ」

そう言えばお前もいきなり攻撃しかけてきたよな……さてはお前も同類だな。

「なのはと俺のこれからの関係は後で考えるところとして、とりあえず話もまとまったことだし戻るぞなのは」

「えー、もつとフェイトちゃんとお話したいよー」

「お前な……土郎さん達に黙って出てきてんだろ？ ばれたら怒られるじやすまないだろ」

主に一緒にいなくなった俺が。

高町家の男共は過保護だから夜部屋を抜け出して一緒にいたなんてばれたら生き残れる気がしない。

「……はーい。またねフェイトちゃん」

「またねマコト、なのは」

二人でいなくなっていたことは保護者連中にはばれなかったものの、さすがにはばれてしまい俺だけが問い詰められることになったのは別の話。